THE MUSE'S
REVOLUTIONARY
CONSCIOUSNESS

■ 谢建明 著

ミューズの抵抗

—芸術における抵抗精神

THE MUSE'S
REVOLUTIONARY
CONSCIOUSNESS

东南大学出版社

ミューズの抵抗

——芸術における抵抗精神

謝建明 著

东南大学出版社

内 容 提 要

日本在台湾进行了五十年的殖民主义统治，这在当时的台湾艺术中有着全面而又深刻的表现。本书就台湾艺术中呈现的日本殖民主义对台湾的政治压迫、经济剥削、文化同化等作了深刻的剖析，揭示了台湾艺术具有浓郁的反抗精神这一特质。

图书在版编目(CIP)数据

缪斯的抵抗 /谢建明著. — 南京：东南大学出版社，2003.3

ISBN 7—81089—224—X

Ⅰ. 缪… Ⅱ. 谢… Ⅲ. 艺术评论—台湾省—现代 Ⅳ. J052

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2003)第 018358号

ミューズの抵抗——芸術における抵抗精神

出版发行	东南大学出版社	出 版 人	宋增民
社　　址	南京市四牌楼 2 号	邮　　编	210096
电　　话	(025)3793329(办公室) /3362442(传真)3795802(营销部)		
网　　址	http://press.seu.edu.cn	电子邮件	liujian 3793329@sohu.com
经　　销	江苏省新华书店	印　　刷	江苏地质测绘院印刷厂
开　　本	850mm×1168mm 1/32	印　　张	8
版　　次	2003 年 3 月第 1 版	2003 年 3 月第 1 次印刷	
字　　数	203 千	定　　价	15.00 元

*未经本社授权，本书内文字不得以任何方式转载、演绎，违者必究。

*东大版图书若有印装质量问题，请直接向营销部调换，电话：025—3795802。

前書き

私はいつでも父を「本の虫」と呼ぶ。私の記憶の中で父はいつでも勉強をしているか、仕事をしている。だから父は私と遊ぶ時間は少ないのだ。１９９８年８月、私は中国から祖父に一人で飛行機に乗せられた。父が関西空港で私を迎えてくれ、マンションに連れ帰った。あの時は本当にうれしかった。だが新鮮感は一週間しか持続しなかった。日本の小学校で学習している時，何も分からないし、他の人と交流はすごく難しかった。だから、うちへ帰ってから、父と中国語でしゃべりたかった。だけど父はいつでも学校で夜遅くまで勉強していた。私はそれらのことを『感動の瞬間』という作文に書き込んだ。

２０００年１月、私は父と母と一緒に東京ディズニーランドへ行って遊んだ。すごくうれしかった。いまでも忘れられない。

父は私がハブー大学か京都大学へ行くのを希望している。ハブーへは行ったことがないけれど、京都大学には何回も行ったことがある。父が希望しているのだから、ハブー大学も京都大学と同じ魅力がある大学なのだと思う。

私は今回、この本の前書きを父に頼まれた。私は父の本の中身は何も分からない。でも、その中身は絶対に神聖なものだと信じる。将来もしも私が本を書くことになったら，ぜひ父に前

書きを書いてもらいたい。

最後に、私は祖父に敬意を表したい。祖父は２００１年に交通事故で亡くなった。祖父の逝去で私の生活に楽しさがなくなった。

この場で父と母に「ありがとう」と言いたい。

謝　纤纤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

論文内容の要旨

一、植民地の性質によって、台湾文学は抵抗の特徴を呈した。この特徴は時代の推移に伴う変化があるが、台湾近代文学の底流に固く存在していると考えている。本論の研究範囲は、三人の台湾作家の文学的抵抗に限定されるが、三人の創作活動に止まらず、三人の創作から見た抵抗の様相を軸に、台湾近代文学その特徴を形成する歴史的、社会的な背景も探究の範囲に入れることにする。

二、個別作家を中心としての先行研究（台湾、中国大陸、日本）が多く、作家の創作の原点およびその文学的軌跡と特徴を特定の歴史環境の中において、つまり作家の文学的活動を形成する社会環境を十分認識しながら、作家の創作活動を通して、台湾文学の近代化を推進するために如何なる貢献を残したか、そして自らの活動を通じて、文学史にどんな影響を果たしたかを明確にするものがすくないように思われる。本論は台湾の賴和、楊逵と張文環の文学的性質を明らかにすることに努めたい。

序章「課題と方法」において、本論の問題意識、研究の視角、研究方法、特殊面、先行研究などについて簡単に説明する。

１９８０年代後半になって台湾植民地時期文学の再評価の動きが台湾と日本でほぼ同時に出てきたが、中国大陸ではその時期の文学があまり評価されないため、いまもなお詳細な論述と考察が生まれていない。

第一章「日本在台統治及び台湾の植民地支配への抵抗」では

本論に歴史的背景を提供する。世界の植民地では、統治国が被支配地の民衆に対して本国人と異なる差別的な待遇をしたのは共通的なのである。したがって、植民地統治は被植民地住民の抵抗を必然的に招来する。日本の五十年にわたった台湾統治も例外ではなかった。本章では台湾の植民地への抵抗、台湾総督府と警察政治、近代政治運動の展開（台湾同化会、差別政策撤廃運動、台湾議会設置請願運動、台湾文化協会、台湾民衆党、農民運動）、十五年戦争における台湾にふれる。

第二章「台湾新文学発生の背景と新旧文学論争」において、主に本論に文化的背景を提供する。台湾の新文学運動は台湾の社会運動、新文化運動に含まれた形で展開されていた。しかし、台湾文学運動は大陸に比べれば、複雑な形式を呈していた。台湾では、言語の面から言えば、文言文と中国白話文、中国白話文と台湾話文、中国文と日本語という問題がある。日本は台湾植民地統治を開始すると同時に、植民地における異民族に対する言語政策もこの時点から開始した。言語政策の目的は、台湾を大陸文化の影響から早く脱却させ、中国との文化紐帯を切り去ることを企画した。一方、植民地の民族にとって、民族のアイデンティティーと言語、伝統、文化の喪失は、民族の消失を意味する。言語と民族とは同様である。言語の社会性質は他民族の言語を排斥する一方、本民族の独立の精神を守るのである。であるから、台湾総督府の言語政策ははじめから強い抵抗に直面した。台湾人は必死に自分の母語を守ろうとして、日本語の日常化を最後まで拒んでいた。当時の台湾文化界には、二つの底流がある。一つは日本統治下では漢文の素養も実社会では無用の長物になったため、これら前途を失った台湾の旧読書人たちを代表する旧詩壇の流れであった。もう一つは、総督府が日

本語を「国語」として普及させることを通じて、台湾自体の民族的個性を消極化させる方向をとっていた。その両者に共通することは、いずれも民衆とは関係の薄い少数の新旧知識人に属しているということだったのである。中国文学運動の強い影響をうけて、誕生した台湾文学は、１９２６年になってはじめて白話文を生み出した。しかし、被支配の台湾知識人は強大な支配者との対決はほとんど不可能である。１９３７年には、中国語の創作が禁止された。

第三章と第四章は頼和とその作品に対する分析を通じて、日本植民地統治の台湾人への政治圧迫を分析する。

いままでは台湾文学史において近代文学の出発点といえば、だれもが当然のように頼和からはじめた頼和は「台湾新文学の父」と称されている。第三章は「白話文創作」の第一人者、「台湾新文学の父」と呼ばれる頼和の作品について分析を加えた。

日本植民地時代における台湾人に対する政治弾圧は、植民地を統治する手段の一つである警察から直接来たのである。日本帝国の領域内において、台湾はもっとも密接に警察が配置されていた地域である。台湾で植民地政策を実施する警察は、台湾人の生死に決定的な権力を持っている。日本が台湾を占領した早期、警察（巡査）はすべて日本人が担当したため、台湾の人々に「査大人」と皮肉的に呼ばれていた。一八九九年以降、台湾総督府は、台湾人を「巡査補」として採用しはじめた。これらの人々は、台湾の人々によって「補大人」と軽蔑されていた。植民地の日本統治者は、巡査、巡査補という厳密的、かつ残酷的な制度を通じて、台湾人を統治する権力を強く握っていた。頼和の多くの文学作品は、いつもこの警察（巡査）にまつわる主題をめぐって展開しているのである。第四章では、彼の代表

作の一つである『秤』を中心に、この小説の中に現れる植民地制度の残酷さとその罪を論じてみた。

第五章と第六章では楊逵とその作品を取り上げ、植民地政府の台湾民衆に対する経済搾取について考える。

楊逵は台湾近代抗議文学の創立者でもあり、また、台湾文学史上で、はじめて国際文壇に知られている作家でもある。彼は文学の中で、植民地支配の暴行を描写し、台湾民衆の抗争精神を表現し、民主、自由、平和を追求し、その過程においていかなる絶望はなかった。そのゆえに、彼は「老兵は死なず」、「潰されないバラ」と呼ばれている。第五章では、楊逵の文学活動を中心にして、楊逵文学の抵抗的軌跡を探求している。

植民地統治の基本的な目的は経済的搾取である。政治的な差別はただその経済的搾取の目的を達成する手段である。植民地当局が土地収奪によって耕地をとりあげ、製糖会社に払い下げた。また、製糖会社を通じて、台湾人に経済的搾取を加えた。第六章では、小説『新聞配達夫』における台湾農民の苦難を取り上げ、植民地当局の台湾農民に対する経済的搾取を探ってみた。

第七章と第八章は張文環の文学活動を例にして、作家の文化同化への批判を探究してみた。

一九三七年から日本敗戦までの八年間は、台湾新文学の「戦争期」にあたる。（この期間台湾総督府の言論取締りと皇民化運動の推進のため、作家達の文学活動は厳しく制限されていた。皇民化と戦争協力の圧力の影響で、多くの作家は皇民文学に没頭していた。皇民化、同化の本質は植民地人民の自由を剥奪し、最終的には台湾人を戦場へ借り出そうとするところにあった。第七章で張文環の文学活動を中心にして、当時の文壇実態をと

りあげ、そして分析することを通じて、植民地政府の台湾に対する文化抑圧の様相を明らかにしている。

太平洋戦争が勃発した後、台湾総督府は文芸作家に時局協力を要求する。一九四二年一月に『文芸台湾』は第三巻第四号の巻頭で「国民文学」の樹立を宣言した。この国民文学の理想は「抽象的な美の彼岸の理想ではない。現実の国家的理想を具現し、国民生活の道標たるべきものである」。それは、文学は国家の理想以外のものは存在することができないということを示している。そのために、当時、皇民練成、聖戦遂行、職域奉公、日本精神を昂揚することを題材とする文学作品が続々と現れてきた。一部の文学家、作家は政治に協力する状態に巻き込まれた。張文環はそのような文壇状況を痛感し、台湾の伝統的美徳を通じて、皇民化と同化主義への否定を表している。第八章では、皇民文学に対する反動としての代表的作品である小説「夜猿」を論じている。

終章「要約と展望」では、本論をまとめ、将来の研究課題にふれる。

目　次

序　章　課題と方法……1
第１節　問題意識と課題
１、問題の提出
２、本論の視角
第２節　本論の特殊性
１、台湾文学における日本語の問題
２、台湾作家の内地での活動
３、内地作家の台湾での活動
第３節　本研究について
１、先行研究
２、本研究の方法
３、本研究の構成

第１章　日本在台統治及び台湾の植民地支配への抵抗……24
第１節　台湾占領への武装抵抗
第２節　総督府と警察政治
第３節　近代政治運動の展開
第４節　一五年戦争下の台湾

第２章　台湾新文学発生の背景と新旧文学論争……44
第１節　台湾新文学成立の背景
１、大陸新文化運動と文学革命

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2、台湾新文化運動と文学革命
第2節　新旧文学の論戦
1、旧文学の局限
2、新旧文学の論争
3、『台湾民報』と新文学の建設
第3節　文学言語における複雑的様相
1、植民地台湾の言語教育
2、言語面での抵抗
第4節　終わりに

第3章　特徴一：血涙の文学
――賴和の文学活動を中心にして……69
第1節　はじめに
第2節　賴和の生い立ち
第3節　賴和と魯迅
第4節　賴和文学の主題
第5節　おわりに

第4章　警察政治への批判
――賴和の「秤」をめぐって……91
第1節　はじめに
第2節　「秤」における台湾農民と警察政治
第3節　主人公の悲劇
第4節　「秤」の構造
第5節　「秤」における警察
第6節　おわりに

第５章　特徴二：傷痕の文学
――楊逵の文学活動を中心にして……112
第１節　はじめに
第２節　楊逵の生い立ち
第３節　楊逵文学における批判意識
第４節　楊逵文学における土地意識
第５節　おわりに

第６章 経済搾取への批判
――楊逵の「新聞配達夫」論……130
第１節　はじめに
第２節　奪収・苦難・反抗
第３節　民族を超えるインターナショナル
第４節　おわりに

第７章　特徴三：哀傷の文学
――張文環の文学活動を中心にして……152
第１節　はじめに
第２節　張文環の生い立ち
第３節　張文環の文学背景
第４節　張文環文学の分期
第５節　『台湾文学』の登場
１、『台湾文学』の創立
２、決戦下の『台湾文学』
第６節　おわりに

第８章 文化同化への批判
——張文環の「夜猿」をめぐって……185
第１節　はじめに
第２節 「夜猿」の主題
１、「夜猿」の粗筋
２、台湾風物と肉親愛
第３節　張文環文学の特徴
１、自然主義・リアリズム描写
２、登場人物——「小人物」
３、憂鬱と挫折
４、軟弱の抵抗
第４節　おわりに

終　章　　総括と展望……212
第１節　本論のまとめ
第２節　今後の研究課題

後書き……218
付属資料……223
１、主要参考文献
２、文学大事記
３、作家年譜
（１）　頼和年譜
（２）　楊逵年譜
（３）　張文環年譜

序 章　課題と方法

第１節　問題意識と課題

一、問題提起

いかなる研究であれ、それを研究として成立させるために、ある程度輪郭の定まった研究対象が存在していなければならない。その研究対象を定義するのはけっして容易なことではないだろうが、ここで、私がとりあげようとしている研究対象、つまり、台湾文学そのものが、一体存在していたのかどうかを問題としてあげたい。

台湾は大昔の地球草創時代には大陸と陸続きとなっていた。いつ大陸からはなれ、現状とほぼかわらない島々ができあがったか明らかにされていない。そのうち、総面積の九十九パーセントをしめる台湾本島は、三万五千七百五十九平方キロメートルの細長い島である。そして、地図でみると、この島の形が両端の尖ったサツマイモにそっくりの格好をしているのがわかる。そこで、この島で生まれた台湾人たちはお互いに「番薯仔」（サツマイモの台湾語）とよびかけあう。

台湾の原住民といっても、種族的にみると、アタイアル族、サイセット族、ブヌム族、ツウオ族、ルカイ族、パイワン族、ピユーマ族、アミ族、ヤミ族の九つの種族にわけられる。奏漢

時代、台湾は「東昆」と呼ばれていた。三国時代の呉国では「夷洲」として知られていた。隋の時、台湾島を「流求」と呼ぶ。台湾という名が最初に出てくるのは、明の万歴年間（一五七三ー一六二〇）に書かれた『蓉洲文稿』においてである。当時の日本文献では、「大冤」、「大宛」となっている。いずれも「タイワン」の当て字である。「タイワン」の本意は、台南地域に住む原住民のシラヤ族（平埔族）が外来者や客人を「タイアン」「ターヤン」と呼んだのが訛ったものとされている。台湾の英語名「Formosa」（フォルモサ）は、ポルトガル人が台湾の美しさに魅せられて発した「Ilha　Formosa」（麗しい島）が転じてきた言葉だという。今、中国で「美麗島」「華麗島」と書かれろのは、この「フォルモサ」が語源になっている。[i]　八、九百年前の北宋から、漢人移民が台湾島周辺の島に渡来した。しかし、漢人の台湾本島への本格的な移住は、歴史的には、明朝の末、一六六一年の鄭成功軍が上陸し、オランダ人が征服した時である。一六八三年、清政府は台湾を清朝の版図に入れた。一六八四年、清政府は台湾を福建省に隷属する台湾府とした。一八八五年、台湾は福建省から分離して台湾省となった。一八九五年、甲午戦争（日清戦争）失敗後に清政府が台湾を日本に割譲した。

明清の時代に、大陸から移民してきた漢族は大別して閩南話と客家話を話していた。地域と血縁によって、台湾在住の人々は各自の方言を話して暮らしていたのである。

一八九五年甲午戦争（日清戦争）の結果、敗戦した清政府は台湾を日本に割譲した。台湾占領後、台湾からの抵抗を鎮圧しつつ、日本の支配が進んでゆくこととなる。一部の知識人は旧来の詩と文章を作って、民族文化の保存に努めていた。

一九一五年西来庵事件への大弾圧を機に、武装抗日運動は不可能となるが、同時に、世界民族自決主義を背景に、中国五四運動、日本の大正デモクラシーの影響を受けて、台湾文化啓蒙運動は新しい抗日民族運動の形で起こってくる。台湾近代文学もその一環として展開された。

中国大陸の白話文運動は台湾文化啓蒙運動の中でもっとも早く取り入れられ、白話文による創作も始まった。日本同化政策への抵抗として、中国への認同意識が重要なものであると考えている人が少なくない。張我軍は次のような認識を述べている。[ii]

> 台湾文学は中国文学の支流である。本流の支流にもたらした影響、変遷は自然なことでもあり、必然なものでもある。

当時、知識人が台湾新文学を中国文学の流れに位置付けた目的は、中国からの文化的分離をさけ、政治上祖国返還を期待するものであった。そうした中国大陸の方向に合流してゆく台湾近代文学には、中国ナショナリズムの烙印が大きく押されていたのである。

三十年代前後、政治運動と社会運動は厳しい弾圧にあって、破滅状態に追い込まれてしまうが、文学運動は最後の抵抗の場としてかえって盛んになった。

一九三七年、日中全面戦争の前後、台湾新文学は厳冬時代に入った。戦後、台湾の作家は日本語から脱却し、中国語の創作をはじめた。

以上から見ると、台湾文学は当然のことながら、中国文学の流れの中にあった。[iii]　しかし、歴史の複雑さを無視してはい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com